

23歳 与謝野鉄幹と出会う

24歳 与謝野鉄幹と結婚

33歳 鉄幹を追って欧州へ

64歳 死去

vol. 4

与謝野晶子

Yosano Akiko

才能を見出してくれた夫への愛を貫き、全力で走り続ける

収入を得る術を身につけておくことは、男女を問わず自由に生きるために必要なことである。歌集『みだれ髪』で知られる与謝野晶子は、自分の才能を収入につなげ、愛する人を支えながら、自らも輝き続けた。

女は嫁にいくから勉強しなくていい

与謝野晶子（出生名：鳳志^{ほうし}よう）は明治11年（1878年）、商人の街としてにぎわう大阪府堺市に生まれた。生家は老舗の和菓子屋で、父は地域の仕事や趣味で忙しく、代わりに祖母や母、姉たちが店を切り盛りしていた。祖母が亡くなり、姉が結婚すると、晶子も家業を手伝うようになる。商いに欠かせない帳簿付けを任されると、計算が早く、正確な仕事ぶりで重宝された。

趣味人だった父は、蔵の中に古典文学をはじめ多くの本をそろえていた。多忙な家業の合間を縫ってそれらの本を読むことが、晶子にとって何よりの楽しみだった。だが、蔵の中で本を読みふける姿に父は良い顔をしない。当時の風潮がそうであったように、父も「女は嫁にいくから勉強しなくていい」という考え方で、女学校で教えてくれる裁縫や家事は自分が学びたいことではなかった。

晶子に転機のかきかけをつくってくれたのは弟だった。文学好きで雑誌に歌を投稿している姉の姿を見て、地元青年たちによる文学会へ入らないかと誘ったのだ。同好の士と出会ったことで、彼女の世界は広がっていく。

古典的な歌のスタイルに行き詰まりを感じていた時、与謝野鉄幹の歌を目にする。率直な気持ちを普段着の言葉で表現した新しいスタイルの歌に衝撃を受け、憧れを抱くようになる。一方、鉄幹も雑誌で晶子の歌に触れ、その才能を見抜いていた。その後対面した2人は恋に



大阪府堺市生まれの歌人。創作した作品は歌集をはじめ、童話、小説、評論など多岐にわたる。少女時代から愛読していた『源氏物語』の翻訳本『新新訳源氏物語』は60歳の時に完成させている。

落ちる。晶子は父の許しを得ぬまま、鉄幹が暮らす東京へと向かった。鉄幹は雑誌『明星』を創刊し、文学界に新風を巻き起こしていた。鉄幹の勧めで書いた晶子にとって初となる歌集『みだれ髪』は、大きな話題を呼んだ。

仕事も、子育ても、愛も全部

晶子が、内縁の妻と離縁した鉄幹と結婚できたのは、24歳の時である。多忙な夫を支え、何人もの子どもを育てながら、晶子は作品づくりにも勢力的に取り組んだ。

多くの新人を輩出し一時代を築いた『明星』だったが、時代の変化とともに陰りが見えてくる。発行部数は最盛期の10分の1まで減り、100号をもって幕を下ろす。収入が減少した家計を支えたのは、夫とは対照的に次々と仕事の依頼が舞い込んできた妻だった。

『明星』の終刊後、“過去の人”となっていた鉄幹に、晶子は欧州留学を提案する。とはいえ、苦しい家計状況で、高額な留学費用をどうやって工面したのか？ 晶子は屏風に自分が詠んだ100首を毛筆した「百首屏風」を作り、それを何枚も売って留学費用に当てたのである。鉄幹が欧州に旅立ってから約半年後、鉄幹のいない生活に耐えかねたのか、晶子は子どもたちを預け、欧州へ向かう。この時、33歳。欧州の最先端の文化や考え方に触れ、視野を広げたことは、帰国後の仕事にも好影響を与えた。鉄幹は大学教授の職に就き、晶子は女子も自由に生きられるような教育を目指し教壇に立っている。

58歳の時、鉄幹が他界。6年後、晶子、永眠。23歳で出会って以来、夫への愛を貫き、数々の名作を世に送り出し、11人の子どもを育て、全力で走り続けた人生だった。

（執筆／ライター 篠田りょうこ）